追 悼 の 辞

2016年４月25日，専修大学長の矢野建一先生（文学部教授）は，あまりにも突然にわたしたちの前から姿を消してしまわれました。享年67歳でした。訃報に接しても，にわかには信じがたく，悲しいというより呆気にとられたまま，時間だけが過ぎてゆきました。しばらくは，大学に来ると，キャンパス全体が喪に服しているように感じられたものです。９号館６階の学部長室では，開いた扉の外を通る人の気配に，矢野先生ではないか，またふらっと入ってきて声をかけてくださるのではないかと期待してしまう日々が続きました。不在を受けとめられないままに，今ではむしろ，矢野先生はいつもわたしたちと一緒にいてくださるのだと思うに至っています。

矢野先生は1949年，長野県伊那市のお生まれです。1972年に専修大学文学部をご卒業になり，立教大学大学院文学研究科に進まれ，修士課程・博士課程で学ばれました。助教授として専修大学文学部に戻ってこられたのは1992年，98年からは教授として，研究・教育に力を注いでこられました。2006年から2010年までは文学部長を務められ，2013年には学長に選任されました。文学部が現在の７学科体制になり，新たに人間科学部が誕生したのは2010年ですから，先生のリーダーシップのもとで，文学部にとって未曾有の大きな改革が行われたということになります。学長に就任されてからは，大学創立140周年となる2020年に向けて，新たな学部・学科の設立や神田キャンパスのさら

なる充実など大学の発展に尽力しておられたことは周知の通りです。

先生の研究分野は日本古代史であり，特に律令国家と祭祀について数々の業績を残されました。また2004年には，中国の西北大学歴史博物館で未発表の遣唐使「井真成墓誌」を見いだされました。日本側の代表として推進されていた国際交流協定校との学術交流のために西北大学を訪れていたときのことです。自らの研究分野に深く関わる文物との，海外での思いがけない出会い。それが歴史学者にとってどれほど幸福なものであったかは察するに余りあるところです。墓誌の謎を解くことは，先生の新しい研究テーマとなりました。また，この墓誌についての報道は大きな反響を呼び，2005年１月には有楽町朝日ホールで２日にわたり，国内外の研究者らによるシンポジウムが開催されました。その成果は，専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』（朝日新聞社，2005年）にまとめられています。

先生にとって，歴史学のおもしろさを学生に伝えることは大きな喜びであったと思われます。学生たちをいつも気にかけて丁寧な指導をされ，多くの学生に優しい先生として慕われていたことが，学生たちから送られた数々の「お別れのメッセージ」からもうかがわれます。

先生についての思い出は尽きませんが，何より印象に残っているのは，今年３月の文学部退職者送別会のことです。例年のように，学長にもぜひお立ち寄りいただけるようお願いいたしましたが，お忙しいので，ほんの短い時間でもと思っておりました。ところが，早々と会場に来られた矢野先生は，パーティの間，ふとお姿を探すといつも会場におられ，ずっと文学部の教員との歓談を続けておられました。う

れしく思うと同時に，おつかれではないのだろうか，気を遣ってくださっているのだろうかと案じられました。

しかし今にして思えば，矢野先生は心から楽しんでおられたのでしょう。学長となり，日ごろ接することが少なくなってしまった文学部の教職員と，少しでも長く一緒にいたいというお気持ちだったのだと思います。グラスを手ににこにこしておられるお顔を，忘れることはできません。ひとの意見にじっと耳を傾け，ひとの気持ちを察してくださる先生でした。

折しも今年，文学部は創立50周年を迎えました。矢野先生が深く愛された文学部を託されたわたしたちは，先生の思い出を胸に，研究と教育にいそしみたいと思います。

矢野先生，これからもわたしたちを見守っていてください。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

2016年11月

専修大学文学部長　廣　瀬　玲　子